論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※　甲　第　　号

氏　　名　Rizki　Andini

論　文　題　目

事態連鎖から見たインドネシア語における ter-構文の働き
— 受動から外れる「結果状態」を表わす ter-構文 —

論文審査担当者

主査　名古屋大学　教授　佐久間淳一

委員　名古屋大学　教授　町田 健

委員　名古屋大学　教授　斎藤文俊

論文審査の結果の要旨

【本論文の概要】

インドネシア語では、語基に各種の接頭（尾）辞を付加することによって、語基を動詞化し、かつ動詞の態を区別することができる。そのような接頭（尾）辞には、meN-接頭辞、di-接頭辞、ter-接頭辞、ke- -an 接頭尾辞があり、論者は本論文で、特に ter-接頭辞に注目し、ter-接頭辞の機能を他の接頭（尾）辞と比較しながら論じている。

まず、第１章では、オーストロネシア語族の言語であるインドネシア語の概要についてまとめている。また、meN-接頭辞、di-接頭辞、ter-接頭辞に言及し、meN-接頭辞が付加された動詞が能動態の機能を持つのに対し、di-接頭辞が付加された動詞は対応する受動態として機能するが、ter-接頭辞が付加された場合は、そのどちらとも異なる機能を有すると指摘している。

しかし、ter-接頭辞が meN-接頭辞とも di-接頭辞とも異なる機能を有しているといっても、その機能が態（ヴォイス）と関係があることは明らかであろう。そこで、論者は、続く第２章で、一般言語学的に見た態（ヴォイス）の概念について先行研究を概観し、特に、言語類型論的な観点から典型的な受動を定義するとともに、di-接頭辞によって表わされる典型的な受動だけでなく、ter-接頭辞によって表わされるような周辺的な受動についても、言語の普遍性を踏まえて、適切な位置づけが与えられるべきだと指摘している。

周辺的な受動としての ter-接頭辞の機能を考察するに当たり、論者は、とりわけ日本語との対照を念頭に置いて論じようとしている。そのため、第３章では、日本語の受動、インドネシア語の受動、それぞれについての先行研究を概観するとともに、インドネシア語の受動を日本語と対照させて論じた先行研究についても検討を加えている。先行研究では、ter-接頭辞は di-接頭辞に比べ使用頻度が低いこと、ter-接頭辞が表わす受動は日本語の自発的な受身に近いこと、また、di-接頭辞が表わす受動がスル型構文であるのに対し、ter-接頭辞が表わす受動はナル型構文であること等が指摘されている。しかしながら、ter-接頭辞は「可能」や「無作為」といった意味を表わすこともあり、ter-接頭辞の機能については、先行研究を踏まえつつも、さらに考察を深める必要があると論じた。

続く第４章では、前章で提起された課題について、一般に受動が持っているとされる動作主の背景化および脱他動詞化の観点から、ter-接頭辞の機能を di-接頭辞と対比しつつ論じている。その際、論者は、自動詞と他動詞が意味的にも形態的にも対になっている有対自動詞、有対他動詞に注目し、ter-接頭辞は有対自動詞的機能を有していると論じた。また、有対他動詞は結果の状態に注目する動詞が多いことから、それに対応する有対自動詞では脱使役化が起こっており、したがって、有対自動詞的機能を有する ter-接頭辞も、「受動性」よりは「結果状態」を表わしていると考察している。つまり、ter-接頭辞を有する文は、受動文と捉えるよりも、結果構文と捉えた方が適切であるというのが本論文の主張ということになる。

第５章では、その主張を検証するため、ter-接頭辞を有する文を di-接頭辞を用いて転換し、その文が成立するかどうかを検討した。その結果、ter-接頭辞を有する文の中には、ter-接頭辞を di- -kan 接頭尾辞で置換しないと文として成立しないものがあり、その場合、-kan 接尾辞は「動作主の対象に対する働きかけ」を意味するため、di- -kan 接頭尾辞を有する文は、対象にある変化がもたらされることを意味し、したがって、それに対応する ter-接頭辞を有する文は、対象にもたらされた変化が「結果状態」として存続していることを表わしていると論じた。他方、ter-接頭辞が di- -kan 接頭尾辞で

論文審査の結果の要旨

はなく、単なる di-接頭辞に対応する場合に、その ter-接頭辞を有する文は、「動作主の対象に対する働きかけの結果」という意味は明確でなくなるものの、「結果状態」を表わしていることには変わりがなく、そのことから、一般に ter-接頭辞が表わすとされる「自発」や「可能」、「無作為性」の意味が生じていると論じた。

【本論文の評価】

統語論研究において、態（ヴォイス）、とりわけ受動は中心的な研究テーマの一つであり、先行研究は数多く存在する。しかし、それでも、対象とする言語によって研究の蓄積の度合いに差があることは事実であり、現に、インドネシア語の場合、話者数のきわめて多い大言語でありながら、受動については十分な研究がなされてこなかった。また、数少ない先行研究も、受動を十分に論じ切れているとは言えず、その理由は、それらの研究が、受動と称される形式の用法の分類にとどまるか、インドネシア語以外の言語との恣意的な比較による考察に終始してきたことにある。論者も、ter-構文を含むインドネシア語の受動形式の考察に当たって、日本語の受動との対比を手掛かりとはしているが、第２章における先行研究の検討からは、インドネシア語の受動を、一般言語学的な概念を使って記述しようとしていること、とりわけ言語類型論的な観点から、言語の普遍性を踏まえた記述を目指していることが見て取れ、そのために、数多くの先行研究を渉猟し、その主要なものについて検討を加えていることは、研究に対する姿勢として高く評価できる。

また、ter-接頭辞を有する受動文が「結果状態」を表わすということ自体は、先行研究にも指摘があり、必ずしも目新しい主張ではないものの、そのことの必然性を、自動詞と他動詞の対応に着目するとともに、語彙概念構造など、一般言語学的に汎用性の高い枠組みを使って明証したこと、また、ter-接頭辞を有する受動文を、meN-接頭辞を有する能動文や di-接頭辞あるいは ke- -an 接頭尾辞を有する受動文からなるインドネシア語の態（ヴォイス）の体系の中に、正当に位置づけることができたことは、本論文の成果であり、大いに評価すべきであろう。

もちろん、本論文に課題がないわけではない。例えば、ter-接頭辞を有する受動文が基本的に「結果状態」を表わすことは確かだとしても、個々の動詞が持っている意味によって、何が「結果状態」に当たるのかは異なるため、ter-接頭辞を有する受動文が表わす意味には「自発」や「可能」、「無作為」といった、ある程度の幅があり得るし、それゆえにこそ、過去の研究では用法の分類が試みられてきたのであるが、本論文では、せっかく動詞の語彙概念構造に注目したり、動詞の分類に言及したりしていて、それらを活用すれば、従来の分析を超えることが十分可能であったにもかかわらず、結果的に、この点に関する考察が不十分なものに終わってしまったことは、大変残念と言わざるを得ない。また、kena という小辞を用いて、ter-接頭辞を有する受動文と似た意味を表わすことができる旨の記述が本文中にあるものの、簡略な記述にとどまっているため、インドネシア語の態（ヴォイス）の体系の記述としては、物足りなさが残る結果となってしまっている。とはいえ、これらの問題は、本論文のテーマが統語論研究の中心的な課題であることから生じるものであり、本論文の価値を損なうものでは全くない。

以上により、審査委員一同、一致して、本論文が博士(文学)の学位を授与するにふさわしいものと判断した。